

HIMALAYA

ヒマラヤ No. 121

● 特集 カンチェンジュンガ学術報告



1981 DEC

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1982年ヒマラヤ登山学校隊員募集

——クン(7,077m)で実施決定!!——

1980年登山学校は、20名中19名がケダルナート・ドーム(6,831m)に登頂するという成果をあげて帰国しました(本誌109号既報)。隊員の中にはすでにヒマラヤ、アンデス、アラスカ等における高所登山経験者から、国内の冬山すら未経験という人にいたるまで幅広い層が参加していました。HAJでは経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとりた安全確実な高所登山を指導しております。隊員はすべて、装備・食糧・梱包・輸送・渉外等の具体的な準備実務にも参画していただき、また国内での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般について体得することができます。次回には自ら遠征を行なえる人材を養成することが、この登山学校の主眼となっております。実際に、卒業生の中には自ら隊長となって隊を組織し、成功をおさめて帰ってくる意欲的な人もできております。

1982年度はカシミール・ヒマラヤの秀峰クン(7,077m)にて実施する予定でおります。ふるって御参加下さい。

実施要項

- 目的** ①クン(7,077m)登頂
②高所登山の基礎修得
- 時期** 1982年7月末～8月末
- 負担金** 69万円(航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員** 20名(申込順)
インストラクター4名(医師含む)
- 申込み** 1981年12月末までに下記宛に申込みごと(資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

1981年5月9日午前11時15分、カンチ主峰に登攀中の6名の姿をコーナ一合地測量点(5,341m)から、1,000 m/m 望遠レンズで捉えることに成功した。
(提供:五百沢智也)

ヒマラヤ No. 121

1. ナンダ・カート(6,611m)事故報告(登山学校隊)

4. **特集** カンチェンジュンガ学術報告

20. **連載** ヒマラヤ閑話 ④6 ————— 水野 勉

22. ヒマラヤニュース〈地域・インフォメーション〉

23. **連載** ヒマラヤの報告書紹介 ⑨クン登頂1979・秋

24. 寸感・事務局日誌



ナンダ・カート(6,611m)事故報告 (登山学校隊)

本協会がインドヒマラヤ、ナンダ・カート峰に派遣していた登山学校隊は9月27日夜から9月28日朝にかけて、C₃に入っていた藤倉副隊長以下7人全員の消息が不明になるというアクシデントに見舞われました。

協会では、ご家族との協力のもとに10月25日、捜索隊11名を派遣しました。正式な事故報告は、これの帰国を待って行われる予定です。

以下は、小島隊長による隊の行動報告と、事故前後の状況についての報告です。

つつしんで7名の隊員のご冥福をお祈りいたします。

隊の行動と事故前後の状況報告

- 8.29 藤倉副隊長ネパールからニューデリー到着
9. 7 先発隊寺本隊員飛行機トラブルで予定より遅れてニューデリー着
- 9.10 先発隊(藤倉・寺本)ニューデリー発
- 9.13 本隊(小島隊長・鈴木・阿部・本田・埜口・齊藤)早朝にニューデリー入りし、午前10時には、アルモラに向かう。
- 9.16 先発隊ベースキャンプに到着し、ピンダリ谷の左岸標高約3,700mに設営。
- 9.18 先発隊C₁予定地までルート工作終る。
- 9.19 本隊BC入りして全員が合流する。
- 9.20 小島隊長を除く7名は、約4,350m付近まで登り高所順応を行う。
- 9.21 藤倉・寺本・HP計3名でC₁(4,800m)設営し宿泊。他はC₁へ荷上。
- 9.22 藤倉・寺本・HPはC₂ルート工作。鈴木・本田・埜口・HP他3名はC₁へ荷上し隊員はC₁入り。阿部・齊藤は、途中まで荷上しBC泊り。
- 9.23 藤倉・寺本・鈴木・本田・埜口の5名でC₂ルート工作。阿部・齊藤C₁荷上し宿泊。
- 9.24 休養日。
- 9.25 藤倉・寺本・鈴木3名でC₂(約5,500m)設営し宿泊。本田・埜口・阿部・齊藤C₂へ荷上。
- 9.26 藤倉・寺本・鈴木C₃ルート工作。本田・埜口・阿部・齊藤C₂荷上し宿泊。小島隊長C₁入り。
- 9.27 朝は快晴で午前7時ごろ7名でC₂を出発した。12時の定時交信の時点でC₃(6,000m)を設営中との報告であった。又、その後の予定を、藤倉・寺本・鈴木の3名で上部へルート工作。他の4名はC₂へ下降との報告であった。次回交信を16時にして欲しいとの申入れがあった。
- 16時の交信はC₃とはとれたが、C₂とはとれずC₁の小島隊長は心配した。この時、C₃と次回交信17時と打ち合わせた。
- 17時の交信で7名がC₃にいるとの報告であった。C₂へ下降するはずの4名は、途

中まで下ったものの、折からの悪天候でト
レールが見つからず、C₃に戻ったことが
判明した。C₃の藤倉副隊長の判断は、この
時間に再度C₂への下山を試みるのは危険
であり、C₃は4～5人用テント1張であ
るが4名を収容して明日C₂へ下山させる
のが賢明とのことであった。

18時の交信では、翌28日の予定について
協議した。天候次第であるが、藤倉・寺本・
鈴木の名は頂上アタック、他の4名につ
いてはC₂へ下山と決定した。この時に藤
倉に雪崩に対する安全性を確認したが、C₂
C₃ともに大丈夫とのことであった。尚、降
雪中なのでC₃も十分に注意するよう指示
して交信を終えた。

9.28 朝7時、C₃と交信を試みるも応答がなかつた。その後8時、10時、12時と交信を試みるが応答しない。この時点でC₃には2台のトランシーバーがあり、両方同時に故障することは考えられないので、何等かのアクシデントが発生したのではないかと判断した。(このような状態で7名全員がコンタクトできないと言うことは雪崩による公算が強いと判断した。しかし、C₂・C₃は私のいるC₁からは確認できない場所なので、あくまで推測の域を出ないものであった。)その結果、今後の対策をたてるために午後1時、BCに向けてC₁を後にした。BCにて、リエゾンオフィサー等と協議した結果、29日にHP3名をC₂・C₃の捜索に向かわせる。一方関係機関への連絡については、29日の様子を見てからニューデリーへ向かわせることにした。

9.29 HP3名が捜索のため上部に向かい午後5時C₁に到着。しかしテント1張が雪崩により埋没していた。その他C₁付近の状態からHPをC₂～C₃へ向かわせるのは危険と判断して、30日にBCへ下山するよう伝えた。

9.30 コックを連絡のためニューデリーへ派遣した。シカル社との雇用関係があるため、まずシカル社へ連絡し、そこから関係機

藤倉和美

雪と岩の会



鈴木陽一

日本電気横浜
岳部



阿部直彦

東京こぶし山の
会



本田荘八

日本電気横浜
岳部



埜口正則

岳友クラブ



寺本政幸

斉藤孝雄

雪苞沓山の会



関への連絡を依頼した。HPがC₁からB
Cへ下山。

- 10.1 天候の回復が見られたので、小島がHP 2
名を連れて再度搜索のためC₁へ上がり宿
泊する。
- 10.2 C₁からC₂へ向かうも積雪が多く、C₂に
到達することは無理と判断して途中から引
き返しBCに下山した。
- 10.3 日本との連絡のため一担BCを予定通り離
れることを決めて荷物の整理を行う。
- 10.4 午前8時トランシーバーで最後の呼びかけ
を行うも応答はなく下山を開始する。
- 10.7 カプコットの手前で協会から派遣された、
伊東と合流。カプコットでは出動してきた
I. T. B. Pの救助隊と会い、状況の説明を
行う。アルモラ着。
- 10.8 午後3時ニューデリー着
- 10.12 夜、再びニューデリーを出発して、BCへ
向かう。
- 10.16 BC着。I. T. B. Pチームは11日BCに
到着して15日までC₁上の搜索を行うも、

C₂途中で悪天候と多量の積雪のため断念
し、16日BCに下山したとのことであった。

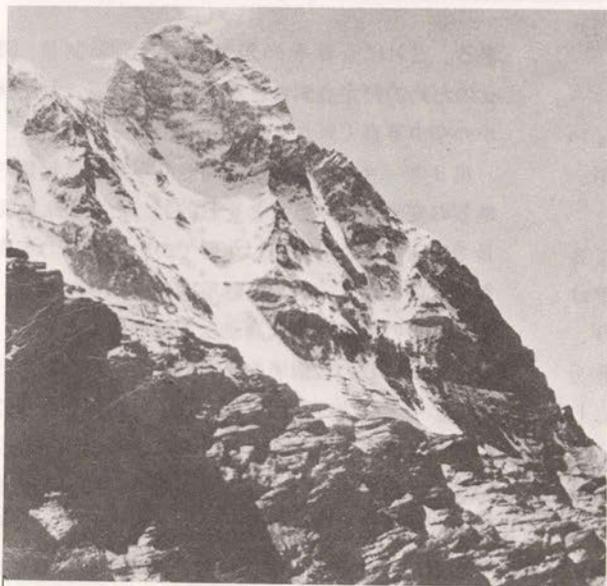
- 10.18 I. T. B. P(16名)チームと共に下山開始。
- 10.23 午前5時ニューデリーに到着。
- 10.25 成田着。

◎ナンダ・カート事故カンパのお願い

今回の登山学校隊の遭難事故に伴う事故処理費
は、当初見込を大幅に上回る見込みであります。
協会としても全力を挙げて資金の調達を行って
おりますが、会員の皆様にも下記のようにご協力賜
わりたく、この非常事態をご賢察いただきまして
何卒、宜しくお願い申し上げます。

※ お願いの内容

カンパ 1口 1万円



ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

- ★ インド政府許可証
- ★ 通関手続
- ★ 交通機関
- ★ ポーター
- ★ ハイポーター
- ★ デラックス食料賄い
- ★ テント宿泊用具
- ★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.

F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India

Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823

日本代表

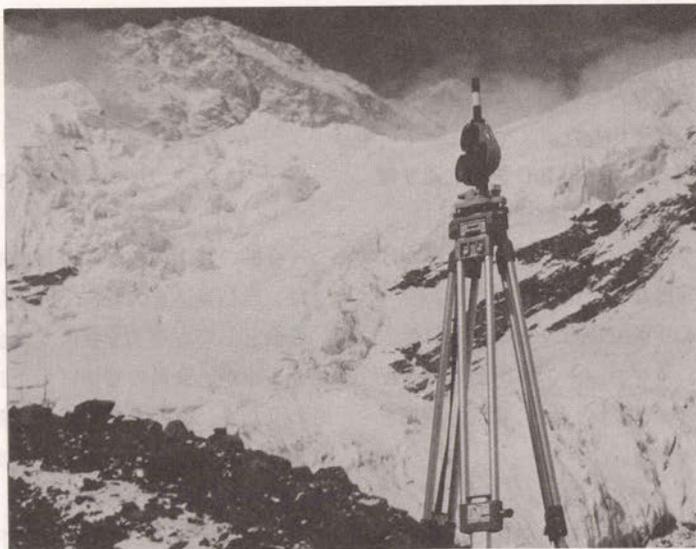
ファー イースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル

☎407-8100(代表)

特集

カンチェンジュンガ学術報告



カンチェンジュンガ遠征隊の学術班は、1981年3月28日から7月4日までの99日間、登山隊と共同作戦による山頂測量作業、氷河と地形の学術調査を実施した。なお空中写真の撮影を中心課題とする航空調査はまだ完了せず作業を続行中であるが、ここに計画全体の概要と春季の学術調査について報告する。

学術班の調査計画

正式な名称を「1981年日本カンチェンジュンガ学術遠征隊(学術部門)」としているのだが、ここでは単に学術班と略称させていただく。

学術の調査計画は、その最終成果から考えて3つのテーマに分けることができる。第1テーマはカンチェンジュンガ山域の地形分類調査であり、5万分1～10万分1ていどの縮尺による地形分類図ないしは地形学図を作成することを目的としている。その調査は現地における観察と記録、空中写真の撮影、同写真の判読、現地・空中写真の総合による図の作成までにわかれ、春季の現地調査、秋季の写真撮影とサンプル調査、カトマンドゥのネパール政府測量局や森林省での資料調査が含まれる。

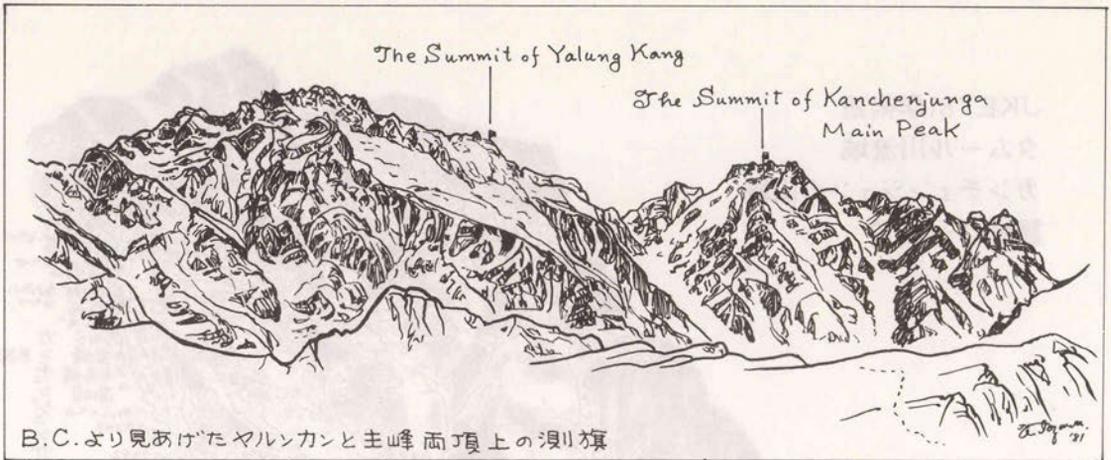
第2テーマは大規模氷河の地形学・氷河学的調査であり、ヤルン氷河、カンチェンジュンガ氷河等に関して、測量、測図の作業を実施し、氷河の流動量、表面形態の詳細な記録を作成するもので

ある。これにも春季の現地調査、流動測量、図化のための標定点測量と対空標識の設置、及び秋季の空中写真(垂直)がからんでくる。

第3テーマは、ヒマラヤ山脈の現在の降起量や地殻の変動を調べることを目的とした直接水準測量の実施とそれに附随した形での山頂標高の点検作業という大きいそして魅力的なテーマである。しかしその実施には、高価な器材の数をそろえ、長い期間多数の技術者を必要とする。そんなことから、その実現は今回不能となり、附随した形のはずの、B.C付近の三角測量による山頂標高の点検を、カンチェンジュンガ主峰8598mを既知点として実施したにとどまった。ただし、ラムゼー付近における氷舌表面形の測図のための標定点測量は実施できたので、秋季の撮影がまたれる。

春季学術班の編成

隊長 五百沢智也 (47) 宇都宮大・愛媛大講師、氷河地形学



B. C.より見あげたマルンカンと主峰両頂上の測旗

- 地理学、地図学。
 隊員 小林 詢 (44) 信州大助教授、
 高山地形学、地理学、残雪と植生。
 隊員 谷本 秀喜 (30) 元JOCV隊員ネパールで測量に従事、SF作家。
 隊員 松岡 憲知 (25) 筑波大学地球科学系研究生、
 岩石の凍結破碎、組織地形学。

春季学術班の目的

くわしいそして正確な山の標高を求めるには、まずその山に登って最高地点を確認し、その位置をすでに高さのわかっている地点から測量すると共に、頂上からその既知点に向って逆方向の観測をも実施する必要がある。頂上位置決定の仕事は、ふつうの登山では、一番高そうな位置に立つだけであるが、長い頂稜を持つ山や頂上部がいくつにもわかれている山では、どこが一番高いかが判然としないことが多い。そこでわが登山隊は登頂隊がハンド・レベル(水準筒)を持参して自分の眼の高さより高いところがないかどうかをチェックすることで頂上の最高地点を決定することにしてきた。次に決定したその位置を麓の地点から視認する必要がある。そのため登頂者は測量用ポールと測旗(紅白の旗)を持参し、頂上位置に設立し、測旗高を測定してB. Cに連絡、麓の三角点からは

セオドライトの望遠鏡で確認し、ただちに測角することにした。

頂上から麓の点を観測する作業については今回考慮せず、頂上位置を確認しての一方的な観測でも従来よりはかなりの前進と満足することにした。またこの作業も、イラムまで進歩してきているネパール測量局の直接水準路線と結ぶことで本当の意義がでてくるのであるが、登頂時にあわせてしか実施できないという事情もあり、このB. C=山頂付近の三角測量作業だけでも先に実施しておこうということになったのである。

ついでに、設定したその三角点をもとにヤルン氷河上流部の流動量の測定作業の実施やラムゼー付近の氷河地形の写真測量のための標定点をトラバース測量によって設置することが目的に入れられた。

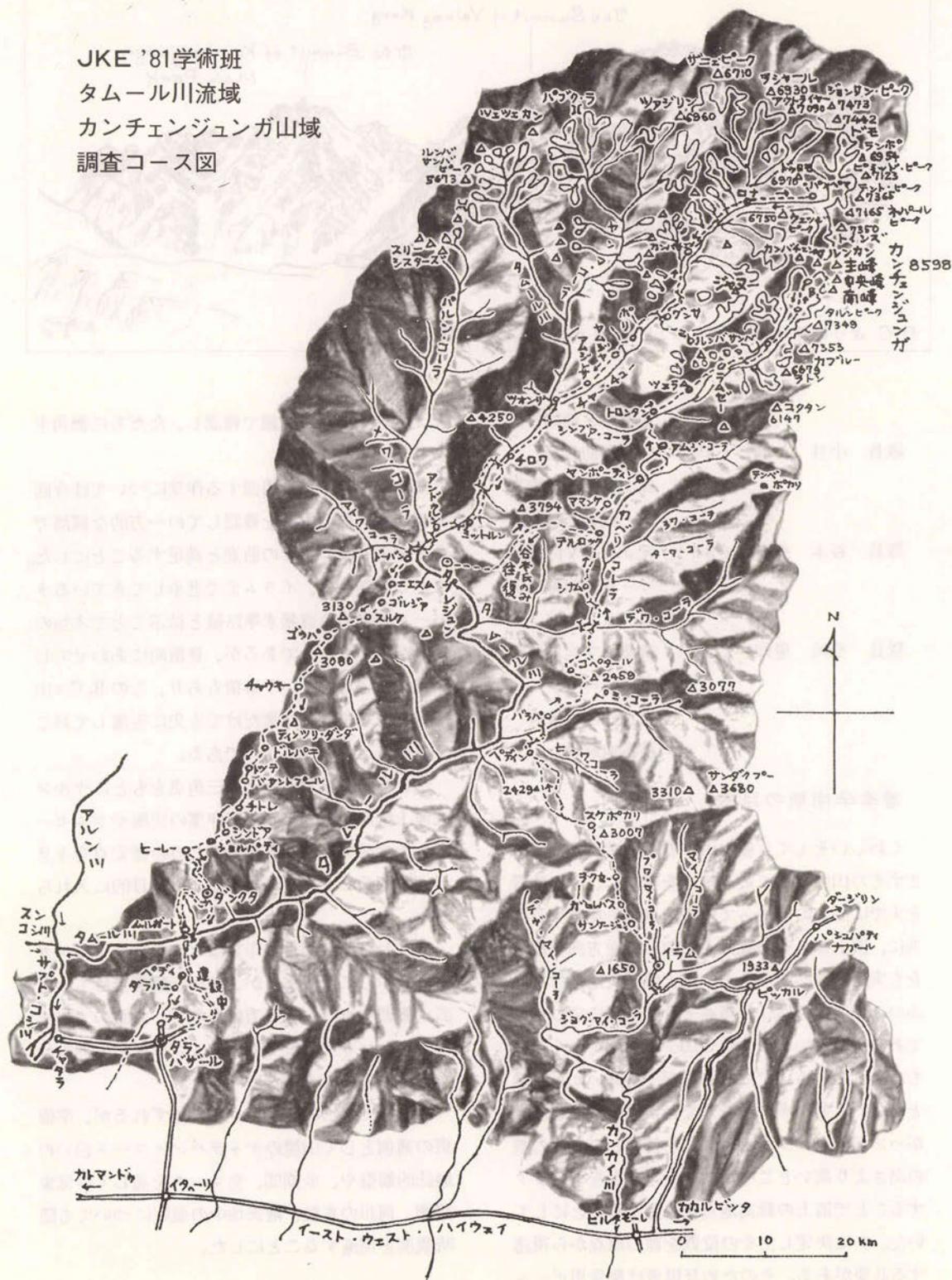
こうした測量関係の作業はカンチェンジュンガ南面を中心に実施するが、地形分類調査はもっと広い範囲をカバーする方針なので、北面のカンチェンジュンガ氷河までカンチェンジュンガ西半分をめぐる踏査することにした。

あわせて3つのテーマからははずれるが、学術班の通例として山麓のキャラバン・コース沿いの地誌的観察や、全期間、全コースを通じての気象観測、河川の水温、地表地中の温度についても随時観測を実施することにした。

資金と器材

本学術調査の資金は遠征隊全体に寄せられた基

JKE '81 学術班
 タムール川流域
 カンチェンジュンガ山域
 調査コース図



金と一部を車両競技公益資金記念財団からの助成金とによった。また測量、調査に日本光学より借用した観測器材を利用した。シベル機械KKより高度計2個、日本ポラロイド社よりポラロイドカメラ1台を借用した。ここで謝意を表したい。使用した器材は次のとおりである。

1. 測量用器材

- セオドライト(NT2-B、NT3-R)各1計2台
- レベル(AES、AESW)各1計2台
- 光波測距儀(BEETL-3)2台
- 同上用プリズム2台
- 三脚 3
- 標尺 2
- ハンドレベル 6
- アルティメーター 3
- 万歩計 4

2. その他の観測器材

- アスマン乾湿温度計 1
- ビラム式風向風速計 1
- サーミスター温度計 1
- 棒温度計(東京管区気象台検定書付) 4
- シュミット・ハンマー(岩石硬度計) 1
- 岩石用ハンマー 2
- クリノメーター 3
- 巻尺(50m、3m)各1
- 双眼鏡 7×35、2
- カメラ 各自
- 台ばかり(1Kg用)

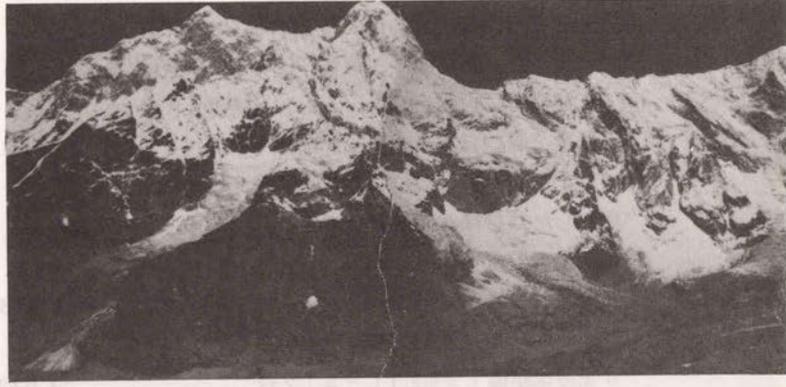
行 動 記 録

- 3月28日 先発隊として、小林・谷本が成田発。
- 3月29日 先発隊カトマンドゥ入り。以後、調査のためのトレッキング許可の申請、測量用器材の調達等に努力。
- 4月8日 後発隊、五百沢・松岡が成田発。
- 4月9日 後発隊カトマンドゥ入り。この際、セオドライト1、プリズム1が税関にて差止めとなる。税関長の承認書を持ってくるように言われる。
- 4月10日 税関の書類のための推選保証書を、測量局、観光局、通産省でもらう努力を

重ねるが、話がこじれてしまい、時間切れとなる。明日より官公庁3日つづきの休みがはじまる。

- 4月11日 先発隊の器材のみの利用を考え、スベアなしで出発と決定する。登頂に間にあわせなくてはならないからである。出発準備の食料、資材の購入開始。
- 4月13日 早朝発のバスでカトマンドゥ出発。夕刻ビルタモーレ着、泊。
- 4月13日 再びバスで出発、昼すぎイラム着。ここでも食料、資材の購入、人夫の募集をやる。
- 4月16日 キャラパン開始、この日ガヒレバス泊、以後、スケボカリ、ベディム、バラバ、ゴベタール、シナムで宿泊。
- 4月22日 テルロック着、警察でタプレジュンのチェックを受けない限り、ここを通過させるわけにはいかないとわれ、谷本氏が1人でプレジュンまで往復することになった。シェルバとポーターはそのまま先行。
- 4月25日 谷本氏が朝帰幕。残留組も出発となる。この晩はママンケ泊。
- 4月26日 最奥の村ヤンボーディン着。先行の荷やシェルバと合流。
- 4月27日 新しいポーターの隊を作って出発。この晩はアムジー・コーラ泊、以後、峠をこえてシンブア・コーラに入り、トロンタン、ツェラムに泊り、ヤルン氷河右岸のアブレーション・バレーにあるラムゼーには30日着。ただし、谷本氏がポールを登頂隊員に渡すため先行し、29日にラムゼー入りした。
- 5月1日～2日 観測器材の点検整備とテスト。
- 5月3日 ラムゼーキャンプ発、夜になってターニングポイントキャンプ入り。
- 5月4日 谷本、松岡不調のため、五百沢・小林の2名がB.C入り。
- 5月5日 谷本・松岡の2名体調やや回復、B.C入り。
- 5月6日 バッへの丘B.Cの下に三角点を設置、山森点とする。

登頂時の観測

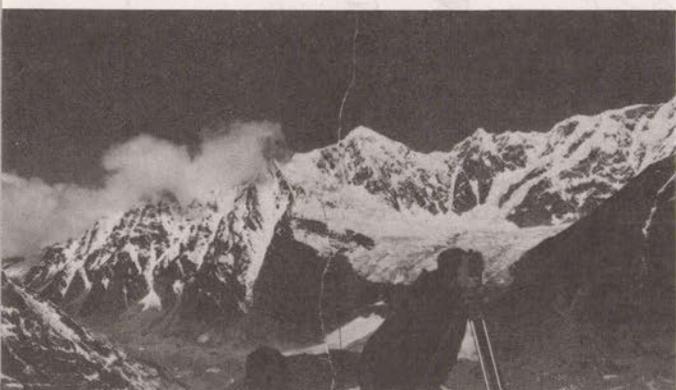


- 5月7日 ジャヌー側の谷頭壁下部岩床に第2の三角点設置、小林点とする。
- 5月8日 コーナー台地第2小丘頂に第3の三角点設置、五百沢点とする。ターニングポイント・キャンプ上の表堆石丘上に第4の点を仮設、谷本氏のペンネームにちなんで甲州点とする。
- 5月9日 登頂決行の日、早朝出発で五百沢点に待機、測距、測角を甲州点、山森点、小林点との間で実施。午前11時52分、2名登頂、12時23分、測旗位置決定、トランシーバーでB.C.の中継連絡を聞きながら測角実施。
- 5月10日～11日 甲州点で待機するが雲のため測量不能。
- 5月12日 谷本・松岡が小林点へ、五百沢・小林がB.C.の山森点へ行き測距を試みるが遠すぎてとどかず、中止。B.C.の祝賀パーティに合流。
- 5月13日 ヤルン氷河上流部の氷河流動調査実施。谷本・松岡が山森点、五百沢・小林が

- 横断パーティをダワサンゲと3人で組む。光波測距儀とセオドライトの組み合わせの作業。
- 5月14日 山森点での観測作業、五百沢点の測旗倒れ、ソガテンバが復旧。午後、谷本・松岡パーティが小林点へ向うが、大雪崩発生。作業を中止とする。
- 5月15日 T.P.C. 出発、ラムゼーに下る。16日は雪のため、整理作業。
- 5月17日 小林氏は登山本隊と共に下山。残留組は標定点測量のための選点作業実施。
- 5月18日 登山隊凍傷組下山、トラバース測量で標定点を作る。
- 5月19日 トラバース測量実施、対空標識設置。ヤルン氷河下流部流動調査実施。基点を象岩そばの大山点(トラバース測量による標定点の1つ)とする。
- 5月20日 ラムゼー発、TPC着泊。
- 5月21日 小林点と甲州点の間に測距中継点を作り光波により測距実施。松岡氏は小林点付近の氷蝕岩面の調査。



▲ コーナー台地三角点（五百沢点）からの眺め（西～北）



◀ コーナー台地三角点（五百沢点）からの眺め（東～南）

5月22日 谷本・ダワサンゲーが山森点へ、五百沢・松岡・ンガテンバ組が第2回の氷河流動調査のため氷河横断往復。

5月23日 T. P. C 発、ラムゼー着。

5月24日 第2回ヤルン氷河下流部流動調査。

5月26日 ラムゼーを出発。ヤマタリ氷河アプレーション・バレーのルンバサンバ泊。

5月27日 グンサ入り。

5月28日 グンサ発カンパチエン泊。以後ロナ泊の後、30日にバンペマ着。

5月31日 バンペマから快晴を利用してドゥロモ山の南尾根を5,800mまで登る。午後下山し、ロナ泊。以後、カンパチエン泊を経てグンサに戻る。5月2日から4日まで人夫集めで停滞。

6月5日 グンサ発ヤンジャ泊。以後アムジレサ、ツォンリ、チロワ、ミットルン、ドバン、ゴルジア、ゴウバ（五百沢不調で2泊）、チャウキー、チトレ、ヒーレー、ペディと泊り、6月18日ダランバザール着、泊。

6月19日 五百沢・松岡はバスでカトマンドゥへ、谷本はビラトナガール泊。シェルパは20日のバスで荷物と共にカトマンドゥへ。

6月26日 松岡カトマンドゥ発。

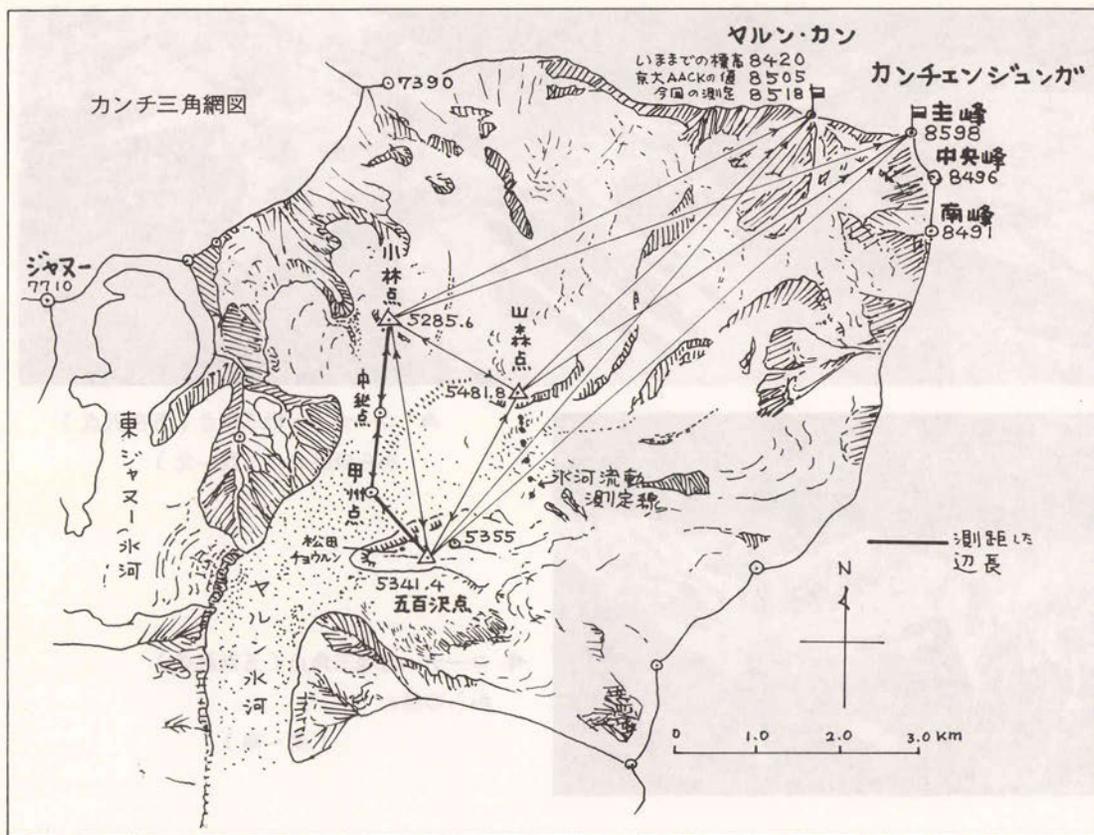
6月27日 松岡成田着。

6月28日 五百沢カトマンドゥ発。ファヒン泊。

7月4日 五百沢成田着。

三角測量

ベース・キャンプ付近に3つの基準点を設置してその相対的な位置関係を求め、それらと山頂の位置関係を決定する作業を行った。辺長と頂角を観測して三角法によって位置を決定するので、できた基準点が三角点と呼ばれるのはごぞんじのとおりだ。基準点であるから、不動の基盤岩石上や地山、安定した堆積物上の巨岩などが望ましいのだが、このヤルン氷河谷頭大圏谷部は側壁が、大絶壁や氷舌急峻な雪斜面でできているため、基準点を設置する場所はきわめて限定されてくる。ま



ず第1に登山コースともなっているパッへの墓のある氷蝕岩稜である。5月6日、作業の便利さ、視通の良さから、B.C.のすぐ下手の南東側岩盤上にジャンピングでボルトを打込み、ボルト中心点を三角点とした。個有名を作った方が便利なので、登山隊の隊長名を拝借して「山森点」と呼ぶことにした。すぐ下をヤルン氷河の本峰、タルンサドル側分流が流れていてパッへの丘はオーバーハング気味の側壁でそれにのぞんでいる。

第2の三角点は、西側の谷頭壁から虎の手のように伸びている山脚（スパー）にと思って出発したが、到達に時間がかかりすぎるのでその手前東側の円錐涵養域氷河の氷舌端より下の氷蝕岩盤の上にボルトを打ち込んで三角点とした。これには隊員の小林氏の名をとって小林点と名づけた。氷蝕の岩面は円滑に磨き込まれていて流動方向に平行な擦痕を全面にきざみ、三日月型の剝離痕も教科書のようにあざやかである。ボルト点には測旗をかかげてポールを立て、針金で三方に張って固定した。この5月7日は谷本氏不調で、途中で待

機してもらった。

第3の点は翌8日、コーナー台地上の第2小丘上に設置した。松田チョウルのあるコーナー台地の段丘上平坦面からさらに登って氷蝕岩稜とモレーンの古いなごりとも見える稜をタルンの方へ辿り、小さな鞍部を過ぎて次の登りでの頂部にある岩面にボルトを打込んでここも測旗を立てた。双眼鏡で見ると小林点、山森点を確認できた。

これらの3つの点は図に見る通りいずれも2Km以上の間隔があるようで、光波測距儀では直接測距できそうになかった。そこで、ターニング・ポイント・キャンプ北東10mばかりの表面堆石丘頂の岩にペイントで印を付け、仮設三角点とした。ここは氷河であり、点の移動が懸念されるので、短期の作業に臨時の点としてしか利用できないからである。後に水平角の測角でもなかなか許容される閉合差におさまらず、京大隊の上田氏と同じような苦労を重ねることとなった。また最初のこの時から、下山の5月23日までの15日間で約1.5m移動したもようである。

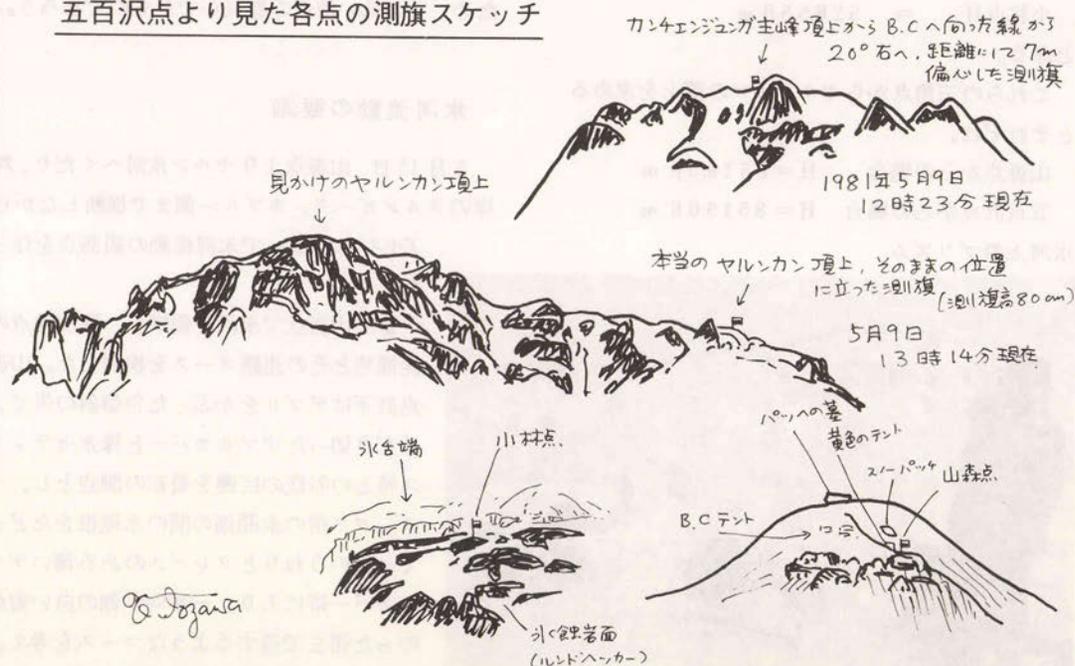
5月9日、降雪や表層雪崩の発生で延期されていた頂上アタック、縦走のチャンスが遂に来了。天候も快晴ですべてがクリアで良く見える。学術班も全員で五百沢点へ登り、セオドライトと望遠レンズを頂上へ向けて待機することとした。ポールと測旗はそう永くはもたないだろうからできるだけ早い機会に観測を実施すべきだからであり、登頂隊とトランシーバーで連絡できるから、測旗と頂上位置の関係や偏心要素もその場で訊ねられるからである。また頂上付近のスケッチ図を作り、どこに旗が立つか、立ったらすぐ記入できるようにもした。五百沢点へ着いたのが、9時20分、主峰隊が見えていなかなかはかどらない（表紙写真参照）のですこしライラする。縦走にはすこしでも早く着いた方が有利だからだ。ついに11時52分、2名が登頂。11時58分隊員5名とシェルパ1名計6名が主峰に立った。12時15分、測旗が立つ。一度右（中央）の岩峰のてっぺんに立ってトランシーバーでここは見えるかと訊ねてきたので十分見えるが頂上に近い方へ移してよいと答える。12時18分水色の服の人が動いて見える。12時23分、頂上から7mのスケッチの位置に決

定した。

ヤルンカンは12時55分頂上へ3名到着、まだポールを持った2名はこないというので山頂部のスケッチと望遠レンズと見くらべながら待つ。13時14分、ヤルンカン頂上より、最高点にポールを埋めこみ測旗を立てたと連絡あり。頂上とおぼしき位置をあちこち押すが見つからず。セオドライトの30倍テレスコープの谷本氏が見つけたというので、のぞきに行った。あるある。ずっと右手の見かけでは低いところだ。再び望遠レンズでのぞき、チラッチラッと赤く光ったり白く見えたりするタイミングを狙ってシャッターを切る。はたして写るものやわからないので数を打つ。まもなくヤルンカンに雲が捲き、やきもきしながら現われるのを待つ。15時下山。午前中の光波測距では、甲州点＝五百沢点の距離が1079.550mと出ていた。下山後、甲州点からの作業を実施した。

その後の各地点での観測結果により、甲州点の移動がかなり問題となる量であり、三角点間の直接測距が持参した測距儀の能力外の遠距離であることから、谷本氏は全面改測の必要を進言したが、それはすでに5月23日という食料、資金その他全

五百沢点より見た各点の測旗スケッチ





ヤルン氷河上流部の流動調査（G 7点より）

ての面で撤収のタイミングだったので、今回は改測を断念してもらった。したがって、小林点＝五百沢点間の距離を 2892.773 m と仮定すればというあまり確かでない辺長を基にしなければならないのは残念である。そうして、カンチェンジュンガ主峰の標高に多用されている 8598 m を用いれば、各三角点の標高がそれぞれ

山森点H = 5481.80 m

五百沢点H = 5341.38 m

小林点H = 5285.58 m

となる。

これらの三角点からヤルンカンの頂上を求めるとそれぞれ、

山森点からの場合 H = 8519.30 m

五百沢点からの場合 H = 8515.68 m

氷河上のプリズム



小林点からの場合 H = 8520.48 m となった。

算術平均では 8518.48 m である。この 8518 m は京大隊の求めた 8505 m （主峰が 8600 m の場合で、主峰が 8598 m の場合は 8503 m となる）より高いが、その差 15 m は、京大隊が、B.C 付近から測量の際にヤルンカン頂上と主峰頂上を推定で観測したためである。ヤルンカン頂上を京大隊はみかけの最高点に近い側と考えて観測したため、その低い地点の標高がでたものであろう。

氷河流動の観測

5月13日、山森点よりヤルン氷河へくだり、対岸のタルンピーク、カブルー側まで横断しながら、アイススクリューで氷河流動の観測点を作った。

まず山森点で氷河を観察し、観測地点の候補地とその連絡コースを検討した。山森点直下はデブリをかぶった急傾斜の帯で、くだり切ったデブリカバーと裸水セラックス帯との谷底の巨礫を最初の測点とし、セラックス帯の氷間湖の間の氷尾根をたどって、次のうねりとクレパスのある薄いデブリカバー帯に入り、一番向う側の白い雪がのった帯まで達するようなコースを考え、スケッチを作った。次に山森点から上流側



にトラバースぎみに下り、岩錐に入ったらあとはがらりと下降する。G 1は礫の上面にペイントでプリズムの台座の輪郭を描示して作った。トランシーバーで山森点の観測班と連絡しながら測角と測距を実施した。山森点の本点からはこのG 1点が見えにくく、氷河流動の観測基点は、山森点のポールを支えるボルトを用いることにした。氷河寄りのボルトである。

ここでセラックス帯の通過のため、クランポンを着用、ロープを結び、ワンアトタイムの行動をとった。このセラックス帯は基盤の傾斜に応じて階段状に氷塔がつらなり、上流側に緩、下流側はほぼ垂直になっている。その間には融氷水が氷上湖を作って半ば凍結し、その上の垂直な氷壁には泡状の凹凸が青色に輝き、空想映画の背景に似た光景を呈している。この帯にG₁、G₂、G₃を設置した。氷の尾根上に、アイススクリューを打ち込み、針頭上にプリズムのをせ、倒れぬように氷雪でまわりを固める。作業が終わったらB.C. から持参した竹竿に標識布をつけて傍に立てた。次回の観測で点を探すためである。

G 4から氷壁を下降、氷の割れ目に落ちこむ水流をとびこえて、氷のうねりの帯に入る。ピッケルでヒドウン・クレバスを発見、跳びこそうと踏み切ったところがすでにクレバスにかかっていたらしく、片足を突っ込みかけるが、危くセーフ。割れ目がせますぎたためだ。以後慎重に進む。

うねり型でクレバスが交差して走るこの地帯は、

はじめデブリがうすく乗っているが、しだいに白い雪のフィールドとなってタルン側の側壁にぶつかる。ここは上部斜面からのなだれ供給があって、雪のコーンができています。ときどき氷河が割れたり、ひびが入ったりするらしく、ビシン、パシッと大きく重い音があたりに響きわたる。G 5からG 8までをこの一帯に設置、G 8＝山森点間は、880.37mの距離であった。すっかり曇ってガスの捲くB.Cへ戻ったのは18時02分であった。

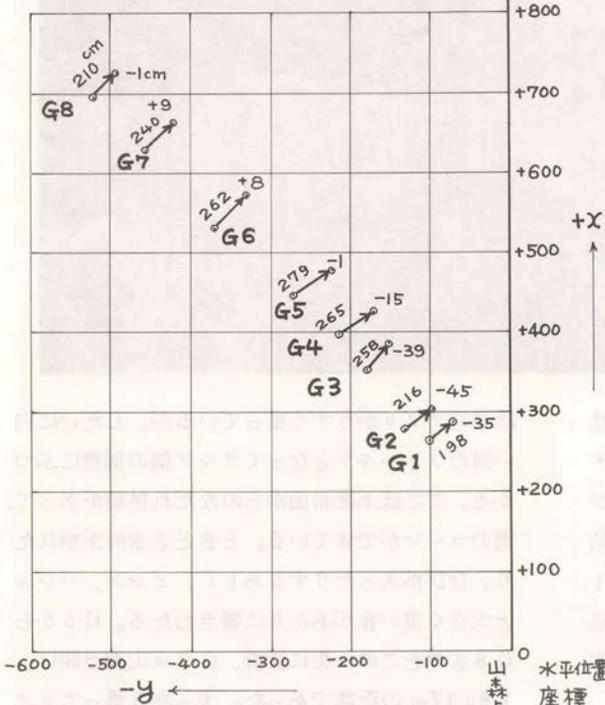
上流水河の第2回流動観測は5月22日に実施した。午前7時30分T.P.C発で、氷河班は氷河左岸の崖下直下を遡行、山森点班は岩尾根のB.C. ルートを辿った。10時54分ようやくG 1着、仕事を開始した。G 1は岩なのでそのままだったが、G 2は旗が倒れ、ピンも雪氷にもぐり気味で、頭に巻いた赤ビニール・テープのせいで見つけることができた感じだった。G 3は氷稜上の点だが、旗は倒れていたがアイススクリューはすぐそばにあった。永面に丸いたて穴が多数あって水がたまっている。小は1センチ位の直径から15センチ径ぐらいまで、深さは30cmほどあり、水が10cm～20cmの深さになっている。その水の中を見ると小礫が沈んでいた。

G 4もなんとなく発見、観測する。G 5の礫地帯に入るとこんどはアイススクリューが氷の表面にかなり露出していた。G 6もスクリューがすごく傾いて露出していた。それがG 7の雪氷帯になると事情が変わり、アイススクリューが表面から5cm

ヤルン氷河上流部流動量分布図

コーナ台地
五百決点方向

自 1981年 5月13日 10時45分~16時15分
至 5月22日 10時54分~14時55分



正位の数値は垂直方向の変位量(cm)
バクトレに記された数値は水平方向の流動量を示す。

もぐっていた。これは融解でもぐりこんだのかもしれない。とにかく探すのにすこし苦労した。それがG8になると旗竿の倒れている近くにどうしてもスクリュウが見つからず、あたりを堀り起して探しまわった。20分ほどもかかって氷の下15cmほどもぐっていたのをようやく発見し、14時55分観測終る。15時帰途についた。T.P.C着は雨まじりのアラレの中で18時15分であった。この氷河の流動観測結果は図に示すように、最大が10日間で2.79m、最小が1.98mであり、中心部と側部で流速に極端な差異はないようである。垂直方向の変位では、セラックス階段の氷上湖間のリッジ部の低下が著しいが、氷上面の融解がかなり進んだ感じであり、そのための低下と、底面の傾斜の大きさのための両方を考慮すべきであろう。

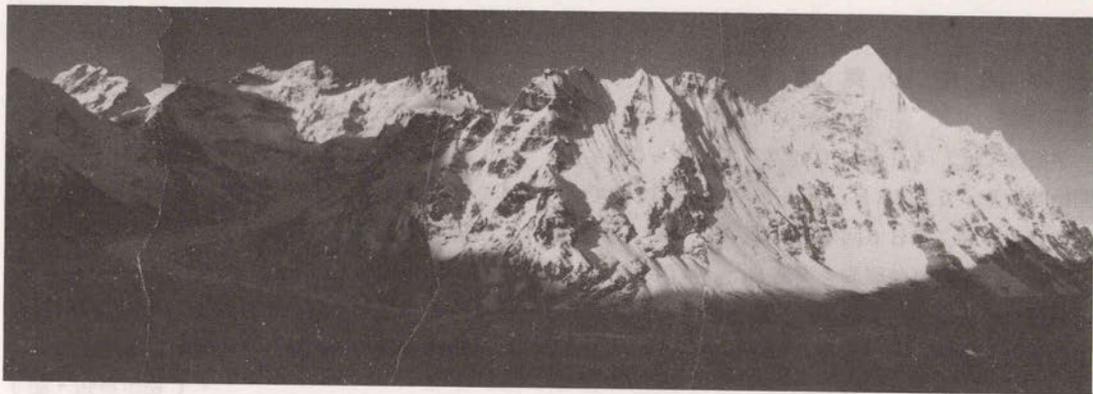
ラムゼー付近の流動調査は、大山点を基点として、アブレーション・コーン上の堆石上にRG1

とRG2の2点を設置、セオドライトによる測角と光波測距儀による測距により観測を5月19日と5月24日の2回にわたって実施したが、この5日間の流動量は0センチであり、現在ほとんど動いていないらしいことが判った。ちなみに光波測距儀の精度は±1cmで1600mまでの観測が可能である。

標定点測量

標定点測量というのは、空中写真測量を実施する際に、空中写真の撮影時におけるカメラの状況を復元して、現地と写真画像の対応関係を図化機内で標定するための基準点を現地で測量し設置するものであり、空中写真上でその点が視認できるように対空標識を設置する作業が付随する。

今回の第1次隊が実施した標定点測量は、ラムゼー付近のヤルン氷河下流部の写真図化のためのもので、第2次隊(秋季)の撮影にそなえての作業である。測量は、セオドライトと光波測距儀によるトラバース測量で、ヤルン氷河右岸のラテラル(側)モレーン上にトラバースによる標定点を設置し、それらをもとにして対岸(左岸)上の基準点を三角測量で求める方式をとった。対空標識は、右岸上のトラバース点にのみ設置し、対岸の地点は、ポラロイド写真とスケッチに記録して、空中写真上で識別できるようにした。ポラロイド写真をステレオで撮影しダーマトグラフや油性フェルトペンで文字記入する方法は、なかなか有効である。右岸のトラバースによる点は6点、対岸、下流の三角による点は8点、合計14点が設定されている。これらは写真測量時になって生きてくるのだが、第2回の流動観測時に、2点のボルトが抜きとられ、対空標識として置いたビニール布も持ち去られていた。ラムゼーカルカの持主のしわざにちがいないが、知りませんというだけであった。標石や金属標識の盗難はネパール測量局のもっとも頭をなやませていることであるが、



① パンペマから見たカンチェジュンガ北面

右上 標定点測量

右中 ボルトと対空標識

右下 シュミッドハンマーで

氷蝕岩面の硬度測定

真鍮の金物が故売でも売れてなにかの収入になるネパール社会の必要悪なのであろうか。白い石を集めて対空標識の代用を作ったが、双眼鏡で他の点については、まだ大丈夫であることがわかった。



カンチ北面の調査

地形分類のための地形、地質、植生、氷河等に関する総合的な観察と調査、そして記録は、キャラバン時から常に実施してきたが、その対象範囲をタムール川全流域に及ぼすべく、ラムゼーから峠越えでグンサに出、チャ・チュー（グンサ・コーラからカンチェンジュンガ氷河沿いにパンペマまで、カンチ北面を踏査した。帰りのキャラバンはダクタ経由でダランバザールに出た。

（五百沢智也・記）



全 期 間 中 の 気 象 観 測

学術隊では、4月15日、イラムでのキャラバン開始時より、6月18日、ダーランへ帰着するまでの約2ヶ月間、毎日6回(6、9、12、15、18、21、時)の定時気象観測を実施した。観測項目および観測方法(使用器機)は次の通りである。

1. 気温、湿度……アスマン通風乾湿計
2. 気圧……気圧高度計

3. 風向、風速……携帯用風向風速計
4. 天気、雲量、雲形、雲向、雲速その他……
観天望気

観測結果のうち、毎日の(1)9時と15時の天気、(2)9時の気温と最高・最低気温、(3)9時の湿度、(4)9時の測定地点の標高を図に示した。

(松岡憲知・記)

地 温 の 観 測

地温観測は、おもにベースキャンプ以低のヤルン氷河下部流域において実施した。ただし、この観測は気象観測に付随的になされたもので、短期間に移動して行われ、かつ、地中20cmまでの表層部に限られた、予備的な観測であることをおこわりしなければならない。

観測方法 原則として、6時～21時の3時間毎、1日6回の気象観測時に、地表面および地中5、10、15、20cmの各層にサーミスター抵抗温度計を刺し込んで、温度を読み取った。観測期間は1981年5月1日～21日であるが、その間、定点観測は行わず、観測地点は調査隊の行動に伴って小きざみに移動させた。

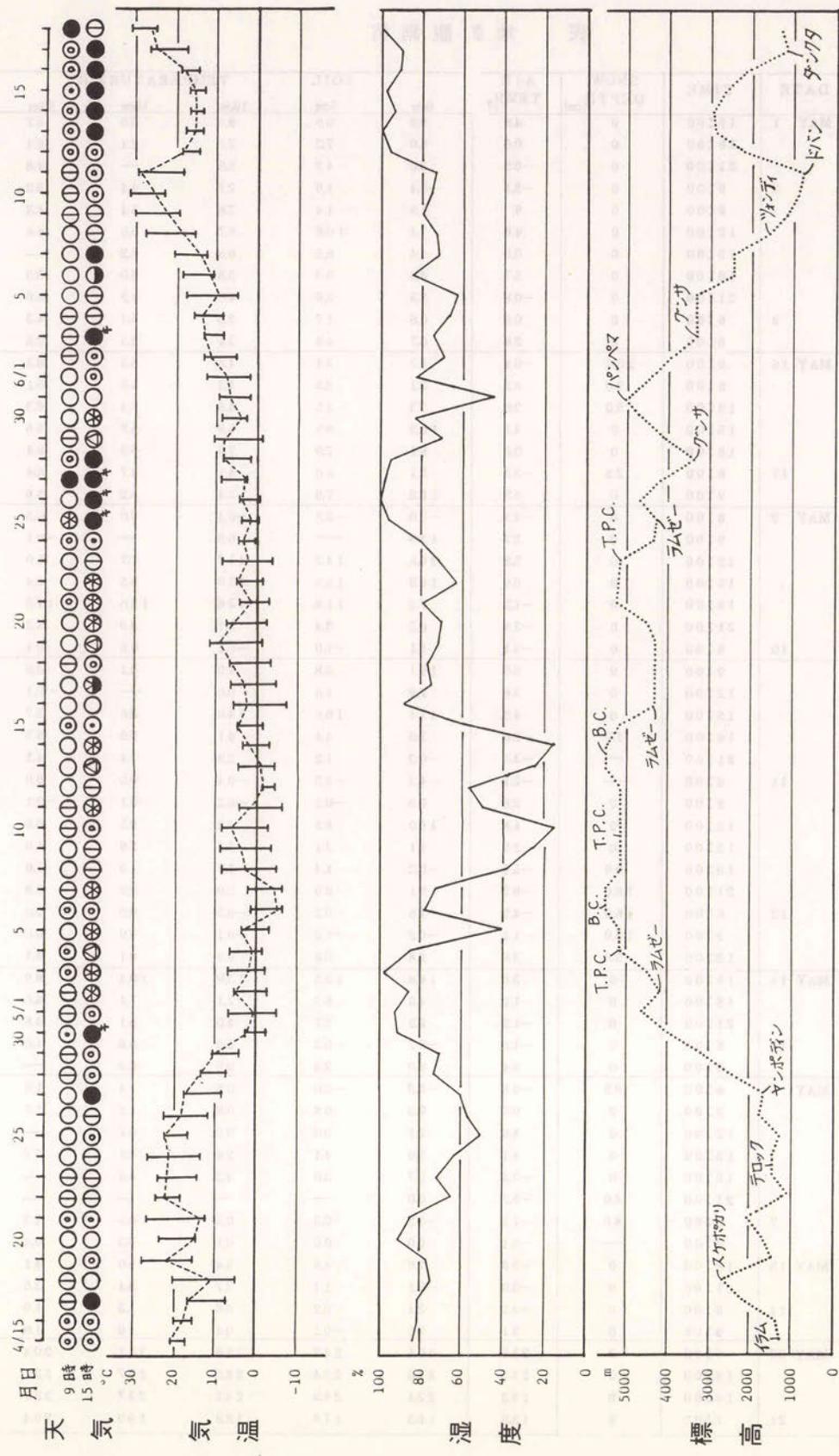
うち、24時間以上継続した観測の得られたのは、ラムゼー、ターニングポイント・キャンプ(T.P.C.)、ベースキャンプ(B.C.)の3地点である。ラムゼーはアブレーション・バレー内の細粒の扇状地性堆積物に被われる場所で、ヤクの放牧に利用される短茎草原に被われ、土壌は表層の腐植化した砂壤土である。T.P.C.はヤルン氷河上の表面堆石の一部で、無植被の砂礫地から成り、1～2m以深には氷河氷が存在する。B.C.はヌナタックの部分であり、わずかにコケ類の生育が見られるツンドラ性の砂壤土である。参考地点として

示したヤンボディン、照葉樹林帯に含まれており、カベリ・コーラ河岸の氾濫原で観測した。

観測結果 上記4地点における観測結果は別表のとおりである。このうち比較的継続した観測値の得られた部分について、地表(0cm)、10cm深、20cm深の地温変化を図示した。0時および3時の観測値を欠いているが、日の出にあたる6時前後が気温および地表温度の日最低の一般的な出現時刻とみられる。どの地点においても20cm深地温になおかなりの日変化が記録されたが、その傾向は表面堆石中のT.P.C.でとりわけ大きい。また、同地点における10cm深および20cm深地温が低温時に0℃内外に集中することも一つの特色である。付近一帯の表面堆石は凍結・融解を繰返し、不安定な状態であった。ラムゼーとB.C.では20cm深地温の日変化は4.7℃以内であり、地中の熱の伝達もT.P.C.ほど急速ではない。

なお、この地域の地温特性の解析には、より本格的な観測体制が必要であることを指摘し、ここでは一応の実施報告にとどめたい。

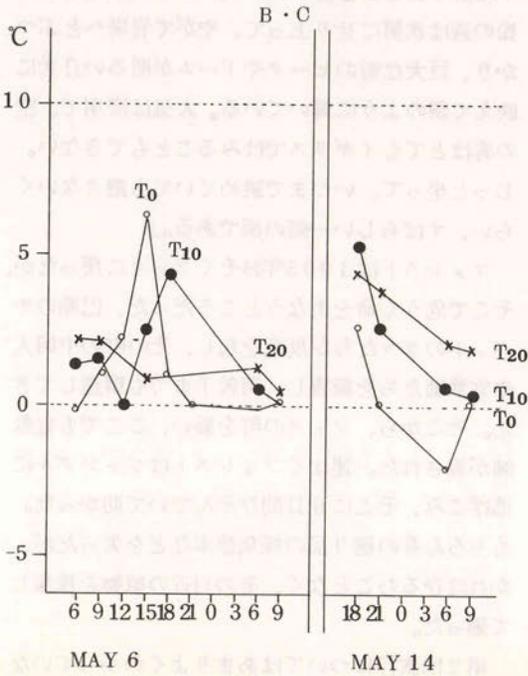
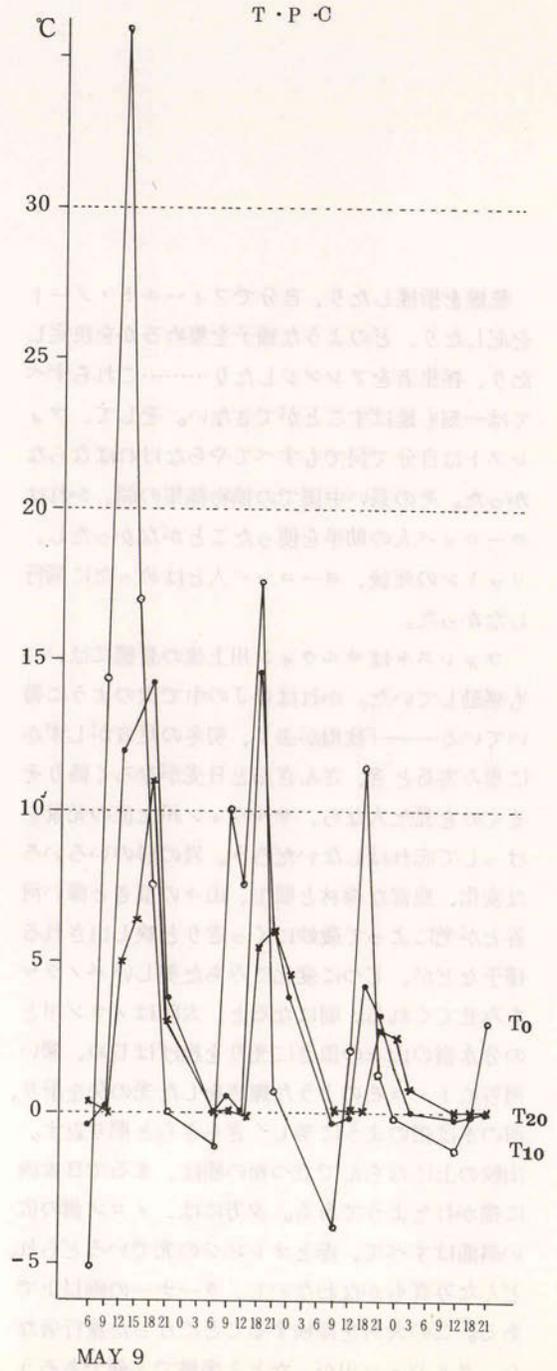
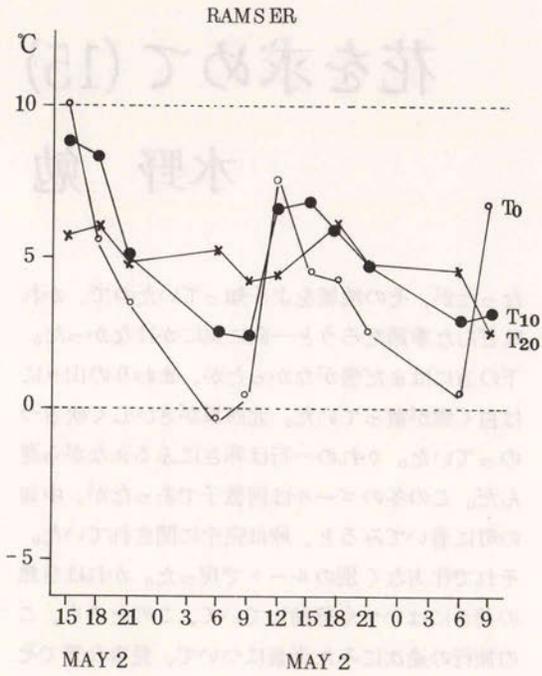
(小林 詢・記)



カンチェンジュンガ周辺における気象観測結果

表 地 温 観 測 値

LOCATION	DATE	TIME	SNOW DEPTH (cm)	AIR TEMP (°C)	SOIL TEMPERATURE (°C)					
					0cm	5cm	10cm	15cm	20cm	
RAMSER 4300m	MAY 1	15:00	0	4.8	9.9	9.9	8.5	6.9	5.7	
		18:00	0	0.0	6.0	7.2	7.7	7.1	6.4	
		21:00	0	-0.5	3.6	4.2	5.0	—	4.8	
	2	6:00	0	-2.1	-0.4	1.6	2.7	4.4	5.2	
		9:00	0	6.1	1.5	1.4	2.6	3.4	4.3	
		12:00	0	4.6	7.4	10.6	6.7	5.0	4.6	
	3	15:00	0	0.5	4.4	6.5	6.8	6.2	—	
		18:00	0	5.7	4.0	5.3	5.8	6.0	5.9	
		21:00	0	-0.8	2.5	3.9	4.8	4.9	4.8	
	MAY 16	6:00	20.0	-0.4	1.7	3.4	4.8	5.5	6.3	
		9:00	9.0	6.2	2.1	3.5	4.3	5.2	6.1	
		12:00	5.0	2.9	2.3	3.5	4.6	5.4	6.3	
		15:00	0	3.1	10.9	9.5	6.9	5.8	5.6	
		18:00	0	0.0	5.1	7.0	7.3	6.9	6.4	
		9:00	2.5	-3.5	2.1	3.0	4.1	4.7	5.4	
MAY 17	6:00	0	5.8	1.6	7.8	5.4	5.2	5.6		
	9:00	0	—	—	—	—	—	—		
	12:00	0	—	—	—	—	—	—		
	15:00	0	—	—	—	—	—	—		
	18:00	0	—	—	—	—	—	—		
	21:00	0	—	—	—	—	—	—		
CAMP	MAY 9	6:00	0	-4.5	-5.0	-3.8	-0.3	0.0	0.3	
		9:00	0	2.7	1.38	—	0.5	—	-0.1	
		12:00	0	5.8	3.65	14.2	11.2	7.7	5.0	
	10	15:00	0	6.9	1.68	15.3	12.0	8.5	6.4	
		18:00	0	-1.2	7.5	11.8	13.6	13.6	11.5	
		21:00	0	-2.4	0.2	3.4	3.7	3.9	3.3	
6:00	0	-3.1	-1.1	-1.0	-0.1	0.0	0.1			
POINT 5000m	MAY 11	9:00	0	6.0	10.1	5.8	1.0	0.1	0.0	
		12:00	0	3.6	7.9	4.6	0.0	—	-0.1	
		15:00	0	4.5	1.74	16.6	14.0	8.6	5.7	
	12	18:00	1.0	-2.6	1.0	4.4	6.1	6.9	6.3	
		21:00	—	-3.5	-0.3	1.2	2.9	3.4	4.1	
		6:00	—	-2.1	-4.3	-2.3	-0.4	0.0	0.0	
	TURNING	MAY 12	9:00	0	2.8	2.0	-0.2	-0.2	-0.1	-0.1
			12:00	0	4.8	1.60	8.5	4.2	0.5	0.0
			15:00	0	-2.5	1.1	3.1	3.5	2.9	1.9
		15	18:00	9.0	-5.5	-0.2	1.4	1.9	1.9	1.6
			21:00	16.0	-6.2	-0.1	0.0	0.0	0.5	0.8
			6:00	16.0	-4.5	-1.6	-0.2	-0.2	0.0	0.0
	CAMP	MAY 14	9:00	12.0	-1.1	-0.2	-0.2	-0.1	0.0	0.0
			12:00	5.0	3.6	2.8	0.0	0.0	0.1	0.1
			15:00	0	3.6	1.68	15.5	13.9	10.4	6.9
15		18:00	0	1.2	4.0	6.5	7.1	7.1	6.0	
		21:00	0	-1.2	2.5	2.7	4.0	5.1	4.8	
		6:00	0	-1.6	-0.7	-0.3	0.0	0.6	1.0	
BASE 5400m	MAY 6	9:00	0	5.4	9.0	2.3	0.9	0.9	—	
		12:00	0	—	—	—	—	—	—	
		15:00	0	—	—	—	—	—	—	
	7	18:00	0	-3.4	0.7	3.0	4.3	4.6	—	
		21:00	4.0	-5.2	0.0	—	—	—	—	
		6:00	8.0	-7.5	-0.2	0.3	0.6	0.9	1.3	
	MAY 13	9:00	—	-0.1	0.0	0.0	0.1	0.3	0.4	
		18:00	0	-2.6	2.6	4.6	5.4	5.0	4.1	
		21:00	0	-3.0	-0.1	1.4	2.7	3.4	3.6	
		14	6:00	0	-3.2	-2.4	-0.2	0.6	1.3	1.9
			9:00	0	3.1	0.0	-0.1	0.4	1.0	1.6
			12:00	0	—	—	—	—	—	—
	YAMPHODIN 1650m	MAY 20	9:00	0	23.9	30.1	24.2	22.6	21.1	20.4
			12:00	0	25.5	31.6	29.4	26.0	23.7	22.0
			18:00	0	19.3	22.4	24.5	24.1	23.7	22.7
21		7:00	0	15.3	16.5	17.6	18.8	19.9	20.4	
		9:00	0	—	—	—	—	—	—	



ヤルン氷河下部流域における地温の日変化

T₀ ; 地表面 T₁₀ ; 10 cm 深 T₂₀ ; 20 cm 深

花を求めて (15)

水野 勉

乾燥を指採したり、自分でフィールド・ノート
を記したり、どのような種子を集めるかを決定し
たり、採集者をアレンジしたり……これらすべ
ては一刻も延ばすことができない。そして、フォ
レストは自分で何でもすべてやらなければならな
かった。その長い中国での植物採集の間、かれは
ヨーロッパ人の助手を使ったことがなかったし、
リットン死後、ヨーロッパ人とはめったに同行
しなかった。

フォレストはサルウィン川上流の景観にはいつ
も感動していた。かれはG Jの中で次のように書
いている——「秋雨が去り、初冬の足音がしずか
に歩み寄るとき、さんさんと日光がひろく降りそ
そぐのを見た人なら、サルウィン川上流の光景を
けって忘れはしないだろう。岩の形のいろい
ろな変化、豊富な森林と植生、山々の頂きと深い河
谷とが光によって微妙にくっきりと映し出される
様子などが、じつに変化にみちた美しいパノラマ
をみせてくれる。朝になると、太陽はメコン川と
の分水嶺の山々の頂きに光りを投げはじめ、深い
河谷にトルコ石のような輝きをした光の矢を射り、
河の水は銀のように美しくきらきらと照り返す。
山稜の上にならんで立つ松の樹は、まるで日本画
に描かれたようである。夕方には、メコン側の広
い斜面はすべて、赤とオレンジの光でいろどられ、
どんな写真もかなわないし、ターナーの画以上で
ある。この大河を探検することになった旅行者な
ら、サルウィン川が、たとえ困難で不便であろう
と、揚子江、メコン川、イラワジ川などのあらゆる
河谷に比べてその自然の美さにおいてはるかに
優れていることを認めるにちがいない。」

1905年になって、ふたたびフォレストは麗江山
脈へ小旅行をした。もう季節もおそく冬の旅行に

なったが、その地域をよく知っていたので、かれ
はどんな季節だろうと一向に気にかけなかった。
下の方にはまだ雪がなかったが、まわりの山々
には白く雪が積っていた。北西風がきびしく吹きつ
のっていた。かれの一行は寒さにふるえながら進
んだ。この冬のゴールは阿敦子であったが、中旬
の町に着いてみると、峠は完全に閉ざされていた。
それで仕方なく別のルートで戻った。かれは自然
の美さにはいつも感動していて、このときも、こ
の旅の途次にみた光景について、見事な筆でそ
の光景の美しさを書いている。「暗い、起伏する
松の森は次第にせり上って、やがて岩場へとぶつ
かり、巨大な雪のピークやドームが明るい日光に
映えて銀のように輝いている。大気は澄明で、空
の青はとでもイギリスではみることもできない。
じっと坐って、いつまで眺めていても飽きないく
らい、すばらしい一幅の画である。」

フォレストは1905年おそくツェクに戻ったが、
そこで危うく命を失なうところだった。巴塘のチ
ベットのラマたちが反乱を起し、その町の中国人
や宣教師たちを殺害し、阿敦子までも南進してき
た。そこから、ツェクの町を襲い、ここでも宣教
師が殺された。運よくフォレストはジャングルに
逃げこみ、そこに9日間ひそんでいて助かった。
もちろん身の廻り品の採集標本などを失ったが、
かれはひるむことなく、その付近の植物を採集し
て廻った。

第2回旅行についてはあまりよくわかっていな
い。1910年1月から1911年3月と1年くらい
中国にいたが、だいたいは大理山脈か麗江山脈付
近ですごした。

第3回旅行は1912年2月から1915年3月ま
でとかなり長いものである。東は揚子江屈曲点近

くから、西は阿敦子の西にあるカ・グル・ブ山塊までひろく歩き廻った。しかし、主な仕事場所は麗江山脈および中甸平原であった。根拠地を麗江の町の北方15マイルほどにあるウ・ル・カイに置き、1913年の大部分はそこにいた。

不幸にもこの遠征は種子に関する限り、大成功とはいえなかった。1914年は南西中国全体にわたって異常に大雨が降りつづいた年であった。麗江では40日以上もぶつつげ降りつづき、麗江でさえ記録的な雨量であり、種子の収穫など全く問題にならなかった。

1917年1月から1920年3月にかけての第4回旅行はたいへん重要である。この頃になると、フォレストはその土地と住民についてよく知っており、採集者たちもよく訓練がゆき届いたので、広い範囲にわたって仕事をすることができ、また徹底的にやることもできた。

その地域の一つは騰越付近で、ぎっしりと樹木の茂ったシュウェリ・サルウィンの分水嶺の山々を含む地域であった。この地域には葉の大きいシャクナゲ、Falconeri および Grande の種類が数多く発見され、ときにはそれらが下生えの竹類などととも主たる植生となっていた。

も一つの地域は木里付近で、揚子江の北にあり、ここはフォレストが達したもっとも北東部にあたる。かれはヤルン河には達したことがなかった。

も一つの地域は1905年にかれがひどい目に会ったツェクの北方にある地域であった。今度はひどく大成功で、二つの重要な地域を徹底的に調査することができた。それはチュ・ラの北方の地方を含む、メコン・サルウィン分水嶺上のカ・グル・ブの山々およびメコン・揚子江分水嶺上の白馬山塊であった。

1921年1月から1923年3月までの第5回遠征もまた重要である。この旅行では阿敦子の東と北との地域が調査され、木理の東と北でもよい採集ができた。しかし、不幸にも僧侶とのトラブルのために種子を集めることができなかった。それからは永北の東方で仕事をしたが、この地方は非常に乾燥していて、雨が降らないことがわかった。大理府の北方、スン・クエイ峠の頂上近くの牧草地で、かれは *Rhododendron recemosum* のきれ

いな花をみつけた。樹の背は低い、ピンクの花が見事にいっぱい咲いていた。

しかし、もっとも重要な調査地域は、サルウィン・猿江分水嶺であった。猿江と中国の地図上には記入されているけれども、これはタロン川のこと、イラワジ川の東支流、マイ・ファ川の支流に付けられたものである。ここで非常に豊富なシャクナゲをみつけた。それでフォレストは、この分水嶺の少し北方の、チベット山岳地帯にはシャクナゲの発生地があるにちがいないという考えを抱いた。この地域で採集された植物のうち、もっとも特異なものは、いろいろな色を持つシャクナゲ類であった。深紅色から黄色、はては雪のような白さにまで、実に多くの色彩をしていた。

1924年1月から1926年3月までの第6回遠征は、大部分の期間、ビルマ国境近くですごされた。今度もまたファーラーの活動地域を調査した。まずピマウおよびチミリ谷付近をさぐり、それからファーラーが死亡した地域、チョチ峠などを訪れた。そこから揚子江に近いリティピンまでも広大な地域を歩き廻った。このときは、それまで調べたことのないサルウィン・メコン分水嶺の一部をも探った。

第7回遠征はフォレストにとって最後の旅行であった。かれは雲南に戻り、それまで採集作業をしてきた最良の地域でふたたび採集をおこなおうとしたのだ。新しい地域には訪れなかった。その後、1932年1月に死亡した。しかし、ぼう大な量の種子は英国へ戻って来た。

植物採集者として、フォレストは第1級の人物であった。かれの乾燥したものは、つねにりっぱになされていて、その種子は熟して、よく手入れされていた。園芸家ではなかったので、そのフィールド・ノートがあまりにもこまかすぎた嫌いがあったが、しかし、それはたいへんの採集者の欠点である。かれは自分の仕事を心から愛し、たいへん良心的に仕事をした。かれの記憶はたいへんのものでその植物の生えている地理的位置ばかりでなく、その形もよく覚えていた。ジョージ・フォレストの名はつねに植物採集者のうちの偉大な人物として記憶されるであろう。

地域ニュース

●H A J 隊ランタン・リ初登頂!!

ネパールヒマラヤの未踏峰「ランタン・リ」に派遣されていた、山形県長井の会員を中心としたH A J隊は10月10日4名が初登頂に成功した。以下は速報である。

ランタン・リ行動概要

- 9月6日 カトマンズ～トリスル(バス)
 7日 トリスル～マニガオン
 8日 マニガオン～ボジュンガ
 9日 ボジュンガ～ドンチェ
 10日 ドンチェ～シャブルベンシ
 11日 シャブルベンシ～シャルバガオン
 12日 シャルバガオン～ゴラタベル
 13日 ゴラタベル～キャンジュンゴンパ
 14日 キャンジュンゴンパ～ランシサカルカ
 ランシサカルカ～4500m
 (アブレーションパレーの中)
 16日 4500m地点～4700m
 (トランスポートキャンプ)
 17日 (隊長、ドクター不調、キャンジュンゴンパへ下る)
 18日 B C (4,940m)到着
 19日 B C建設(4,940m)
 22日 C 1建設(5,550m)
 29日 C 2建設(6,200m)
 10月3日 C 3建設(6,630m)
 10日 第一次アタック、山田、若尾、那須アンリンジの4名が午前11時20分初登頂に成功。
 11日 第二次アタック、飯沢、中岡の2名が午前10時58分登頂成功。
 14日 ベースキャンプ撤収
 21日 カトマンズ帰着
 24日 植松隊長帰国

H A J隊としては、カンジェラルワ(6612m)

に次いでネパールヒマラヤ二つ目の初登頂の記録となった。

●ドルジェ・ラクバ陥つ!!

H A J隊と同時にランタン氷河の秀峰、ドルジェ・ラクバ(6,990m)の初登頂を目ざして入山していた、法政大学Ⅱ部山岳部の片岡邦夫隊長以下5名は、10月18日片岡隊長以下3名とネパール側隊員1名の計5名が初登頂に成功した。

ドルジェ・ラクバは、カトマンズ市内からもその綺麗な姿を見ることができ岳人の間では人気の山である。

インフォメーション

●藤江幾太郎・ネパールへの チャリティバザール展

- 12月14日(月)～19日(土) ○11時～19時
 ○画廊・アートプラザ (最終日17時)
 地下鉄日本橋下車2分、柳屋ビル裏手
 中央区日本橋2-1-18 日昌ビルF1
 電話 274-0892

白日会所属の同人展「たたら展」のコーナーにネパールへのチャリティ展を併催します。色紙など中心の出展の予定です

多数ご光来をお待ちします。

●日本ヒマラヤ会議等の延期

先月号でご案内しました日本ヒマラヤ会議等について下記のとおり延期いたします。

◎前橋会場

日時 11月28日(土)14時～29日(日)15時

場所 変更なし

◎福岡会場

日時 期日未定ですが来年度に実施予定。

◎広島集会

日時 12月6日(日) 6時30分

クン登頂1979・秋

東海学生山岳連盟インド・カシミール遠征隊

先鋭的志向もなく、力量も並レベルのごく一般的な登山愛好者が、初めてヒマラヤへ行こうとする時、どのような登山を志向するかということは、筆者にとって比較的興味ある事柄である。H A Jの仕事に携っていると、機関誌の構成、研究会のあり方などを考えるうえで、ついそういうことを考えるのである。

前月号のこの欄で「神奈川大ピエンガバ隊」の引合いにされたB隊というのがこの登山隊である。私の知る範囲内では、この隊のメンバーたちは「ヒマラヤ一年生」の最も典型的な姿のように思える。今日、ピエンガバのような低くてもユニークな山をめざそうという人は減りつつある。見栄えのする未踏峰が少なくなってきたこと、7,000メートルという高度がきわめて身近なものになってきたこと——そういった時代の推移のなかで、未登、既登の別や、登攀のスタイルなどにこだわることなく、とにかく見栄えがよく、かつ7,000メートル以上の山の頂に立ちたいと考える人が増えてくるのは必然であろう。かく云う筆者もファーストエクスペディションの頃は、そんなようなタイプだったように思う。

そのようなごく一般的な若い人たちが、東海学生山岳連盟という媒体を得て漠然と集合し、ひとつの遠征隊ができあがった。「一つの頂きをめざすために生まれた即席登山隊は往々にして多くの問題を抱えると言われる。我々がその一例なのかもしれない。我々の抱える問題、あるいは克服すべき課題は現実計画を進めていく中で、強烈に

顕在化するものもあったし、深く潜在化していくものもあった。そのどれもが、今になって我々に重くのしかかる」と最初に述べられている。そのようなことは筆者にもよくわかる。願わくば、その問題を分析、検討する姿勢が報告書のなかに欲しかった。せっかく「今になって我々に重くのしかかる」と自覚していながら、それに触れていないのは残念である。

装備、食糧、資料等はよくまとまっている。特に次の「ヒマラヤ一年生」のためはかなり役立つ記事である。

活字ではなく、隊員各自が手書きしたものを持ち寄って一冊の本にまとめてあり、個性が出ておもしろい。手書きの割には読み易い。ただ、写真が鮮明でない点は惜まれる。全体に黒っぽくて不鮮明なのは、カラープリントをモノクロで印刷しているためと思われる。報告書を出す気持があるなら必ずモノクロフィルムも持参することである。写真の持つ記録的重要性について、この隊に限らず、もう少し配慮してもらいたいものである。

とまれ、小冊子の割には比較的よくまとまった報告書である。 (ふ)

A 5版 164頁 昭和56年9月4日発行

東海学生山岳連盟刊 1,800円

発行所 アジア文化研究会 〒468名古屋市中
白区一ツ山1-44-7

登山隊報告書ご寄贈のお願い

H A J事務局ではヒマラヤ登山隊の報告書の収集整理を行なっています。ご寄贈いただいた報告書は永く事務局に保管し、来会者の閲覧や協会活動に役立てています。また、いくつかについては

順次この欄で紹介させていただきます。よろしく
お願い致します。

➤10月3日午後3時に稲田専務理事宅に入った、ナンダ・カート隊の悲報から一ヶ月が過ぎようとしている。遭難が起きる度に「まさか、あの人が……」との驚きが今回もつきまとう。

➤遭難事故の原因は、いくつもの要素が重なっている場合が多い。日本のヒマラヤ登山史上では異例となった捜索隊が派遣されているので、主原因についてはある程度解明されるものと思う。彼等の帰国を待って、徹底的な事故解明を行いたいと思う。

➤事故が解明されただけでは、切角の努力も次代への礎とはならない。これらを常に所持し、情報として公開提供できる機関が常設されることが望まれる。

➤今号で代理編集長の任を終えることになり肩の荷がおりの思いである。(山森)

事務局日誌 (10月)

3日(土) 登山学校隊事故第一報入る

- 4日(日) 家族説明会(東京)
- 8日(木) 小島隊長から直接本部へ報告入る
- 10日(土) 在カトマンズ日本大使館へ赴任する木村氏へ登山事情説明
ランタン・リ峰H A J隊初登頂
- 25日(日) 小島隊長帰国
捜索隊成田出発
- 28日(水) 事務所賃借契約更改
- 31日(土) 小島隊長報告会(東京)

ヒマラヤ No 121 (12月号)

昭和56年11月20日印刷 56年12月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号



インドヒマラヤを日本語で!!



UNITED TRAVEL SERVICE (P) Ltd.

■インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語でひきうけています。本社にも東京事務所にも日本語に堪能なスタッフが多数おります。

■許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレン

ジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。もちろん日本語で!!

東京事務所 〒141 東京都品川区西五反田2-23-11-202 電話 03-493-4920

本社(デリー) 802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India

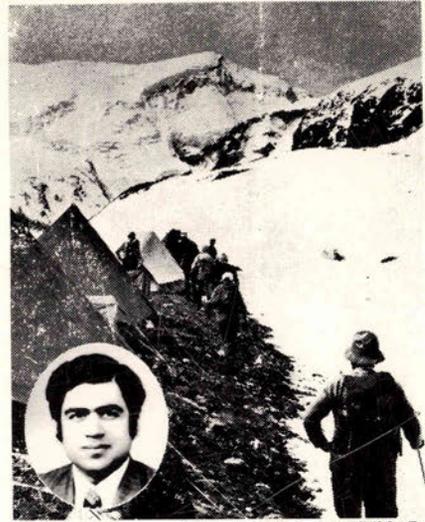
Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable: YOKOSO

Shikhar Travels

— シカール・トラベル —

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED



1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



全世界のネットワーク

AFIA ホーム 保険会社 海外 山岳 保険

※凍傷・ヘリコプターチャーター料等も支払います。

※例 4ヶ月間の場合＝死亡100万円、救援者費用100万円で25,520円です。

※詳細は下記へお問い合わせ下さい。

取扱代理店

郷インシュランス・コンサルタント

[ホーム保険会社代理店]

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-281-2981

相談所

ホーム保険会社首都圏支店

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-211-4401

担当：寄木康男(ヨリキヤスオ)

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601代
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219